

## 第一章

「はあ…はあ…、やっと着いた」

メロは肩で息をしながら見慣れたギルドの入り口前にどさっと座り込む。顎のあたりで切り揃えた黒髪はボサボサで、頭に生えた猫獣人特有の耳も揺れる尻尾も毛並みが悪い。少しだけ釣り目の瞳は疲れのせいで虚ろになっていて、そばかすの散った小さくて少し尖った歯が覗く口元は土で汚れてしまっている。

「うう…早くクエスト完了申請しないと」

メロが何とか立ち上がろうとした時、肩に担いでいた革袋が落ちてしまい、中に入っていた魔獣の毛皮が地面に散乱してしまった

「ああ…もう！」

一人で下級魔獣を討伐し、依頼主が欲しがっている毛皮を剥いできた。しかし、皮脂で滑つてうまくいかず、体中が獣の体液で汚れてしまっているメロはしゃがみ込んで毛皮を拾い集める。

メロはギルドに所属はしているものの、まだ最低ランクのF級冒険者だった。もうとつくに成人しているにも関わらず、体が小さいせいでいまだに子供と間違われるメロは、獣人に邪な思いを持つ男たちにこれまでに何度となく危険な目に遭わされてきた。

戦争孤児で親もいないメロは孤児院で育ったが、成人してもそこにいる訳にはいかず、独り立ちした。自分を子供扱いしまるで愛玩動物のように囲おうとする輩に負けないよう、メロはギルドの冒険者になったのだ。獣人であるメロは人間よりは身体能力が高いが、いかなせん何の特技もないので、愚直に武器で戦うしかない。まだまだ弱くすぐに疲れてしまうメロは、いま

だパーティーを組む仲間を見つけれず、毎日一人でクエストをこなす日々を送っているのだ。

「えっと、今8個で、あと2つは…」

暗がりの中で残りの毛皮を探していると、ギルドの入り口から誰かが出てきた。

「メロ、何してるの？」

「うぐ…」

地面に四つん這いになって毛皮を探すメロをかなり上から眺めているのは、それはそれは美しい天使族の男だった。真っ白な髪と肌に、長いまつ毛に縁どられた美しい瞳。薄い唇は何故か少し嬉しそうに上がっている。そんな神が作りあげた美の象徴みたいな顔をしているくせに、190はあろうかという高い身長と全身にバランスよく付いた逞しい筋肉。

男性が欲しいと思うであろう全てを兼ね備えている男は、無様な姿を晒している自分を見て「ああ」と勝手に何かを納得してにいと目を細めた。

「確か今日は下級魔獣の討伐クエストだったでしょ？朝出て行ったのに、帰りはこんな真夜中？随分時間がかかったんだねえ。そんなことじゃあF級から上がるのに100年はかかるんじゃないの？」

「ぐうう！う、うるさあい！」

羞恥のあまり顔を真っ赤にしたメロは勢い良く立ち上がって天使族の男、もといギルドの最強パーティーに所属するS級冒険者のルイスを強く睨みつける。

「ちょ、ちょっとずつ実力は付けてきてるんだから、すぐE級に上がるよ！ル、ルイスなんかすぐ追い抜くんだからね！」

「追い抜こうにもS級が最上位なんだけどね。まだ誰ともパーティーを組

めてないのにS級なんて随分と大きく出たね」

ルイスが上からメロの顔を覗き込んで笑う。その端正な顔があまりにも近くて、メロはたじろいで後ろに下がってしまった。

「あ！ルイスさんだ！ルイスさんが帰ってきてる！」

すると後ろから数人の女性冒険者の集団が近付いてきて、頬を赤く染めてルイスに駆け寄って来る。

「ルイスさん、今日帰ってきたんですね♡」

「良かったら、一緒に食事しましょうよお。この前、ご飯に連れて行ってくれるって約束したじゃないですかあ♡」

「ん？そうだったかな？」

「そうそう！ね！いいでしょ？」

「うん、お腹も空いてるし、いいよ」

「やったあああ！」

美しい女たちがルイスの体にしがみつく。そしてぐちゃぐちゃに汚れたメロにやっと気づき、顔を顰めた。

「ちよっと！すつごく汚れてる！大丈夫なの、メロ！」

「…はい」

「全く！弱いのに一人でクエストに出るからよ！私たちの誰かを誘いなさいって言ってるのに！」

「はい」

この女性たち、ルイスに恋をしているようだが、とても気のいい人達で弱いメロにも優しくしてくれる。曰く「優しい女なところを見せればルイスさんが好きになってくれるかも♡」ということらしい。

「この子たちに気を遣わせるようじゃまだまだだね、メロ」

グサッと傷つく一言を言われ、メロは涙をこらえてルイスを睨みつける。  
「な、仲間もすぐにできるよ！そしたらいっぱい一緒にクエストに出て、いっぱいお金稼いで……っ！」

「……いっぱい一緒にねえ。そんな奇特定の仲間ができるといいね、メロ」  
「っうっうっうっ！」

弱い自分とパーティーを組んでくれる人間などいないと言われたように感じたメロは、さらに鋭い視線をルイスに向ける。

「できるよ！っ中に入りたいからそこどいて！」

ギルドの入り口を塞ぐように立っているルイスを横に押しでどかせると、メロは革袋を担いでギルドの中に入ったのだった。

メロが胸躍らせてこのギルドに入ったのは3年前だった。所属する冒険

者の質も高く、クエスト依頼者からの評価も非常に高いこのギルドに入るには、一応の審査があり、メロはドキドキしながら合否を待っていた。そして合格の知らせが来た時、自室で何度もジャンプして喜んだのだ。

そして翌日、正式に冒険者登録をするためにギルドを訪れた時。

「あゝ？なんだこのチビ。子供が来るような場所じゃねーぞ」

早速柄の悪い冒険者に絡まれたのだ。

「違います。…小さいですが、私はもうとつくに成人しています。今日からこのギルドの冒険者です」

「はあ？お前みたいな奴があ？はははは！その可愛らしい容姿で男に媚び売ってた方が稼げるだろ、子猫ちゃん」

ぎやははと下卑た笑い声を上げられる。

「…今日から同じギルドの仲間になる人に対して失礼じゃないですか？」



メロが怒りを抑えて睨みつけると、男たちはニヤニヤと笑って小さなメロを見下ろす。

「はあ？仲間？お前が俺の仲間になんかなれるかよ！ベッドに連れこんできやんきやん啼かせるお友達ならなってやつてもいいけどなあ！」

「っ！」

男の手がメロの体に伸びようとした時。

「…邪魔だよ」

「うごおお！」

男の髪が背後から掴まれ、ものすごい勢いで引っ張られる。バランスを崩した男は無様に床に後頭部から倒れ込んだ。

「ついてえなあ！誰だ、おい！」

「僕のこと知らないの？」

「っあ…！」

地面に倒れ込んだままの男の前にしゃがみ込んだのは、美しい天使族の男、ルイスだった。その後ろには退屈そうに大あくびをしているオーガ族の男と椅子に座って食事の注文をしている九尾の男。

（この人たち…このギルドのS級の人たちだ）

事前にギルドから説明を受けていたので分かる。このギルドが他国にも名を馳せる程に有名なのは、この3人がいるからだとも言われる程の実力者。美しい容姿も相まって、クエスト依頼が殺到している優秀な冒険者たちだ。そのうちの一人、ルイスがにっこりと笑って立ち上がると、綺麗に磨かれたブーツで男の顎を蹴り上げた。

「うごお！」

「ひっ！」

ルイスのにこやかな笑顔と激しい暴力とのギャップにメロは小さく悲鳴を上げて、尻もちをついてしまう。ルイスは鼻血を出した男の耳元で何かをぼそぼそと呟いた。すると男はさつと青ざめて、慌てて数名の男たちとともにギルドから出て行ってしまう。それを見届けたルイスはゆっくりとメロの所に歩いてきて、手を差し出した。

「こんにちは、小さな子猫ちゃん。立てる？」

「っ！た、立てます！」

あまりの美しさに数秒見とれてしまったものの、メロは子猫と呼ばれたことに腹を立て、自分でスクツと立ち上がった。それを見て一瞬きよんとした顔をしたルイスがにっこりと笑う。

「ふふ、強くなっただね子猫ちゃん」

「…？」

言葉の意図が分からずメロが怪訝な顔を見ると「何でもないよ」と手を振った。

「それより、君が今日から新しくギルドに所属する子？」

「あ、は、はい！メロと言います！えっと、ルイスさん…で良かったですか？」

「…ルイスでいいよ。それじゃあパーティー申請しようか」

「へ？」

「パーティー申請だよ。冒険者として一人で行動する人もいるけど、やっぱり仲間がいた方がいいでしょ。ほら、ここに名前書いて」

「へ？あ、あの…」

ルイスから書類を渡され、空欄を指差される。

「ほらここ。ここにお名前を書くんだよ」

背を押されて椅子に座らされると、背後からトントンと書類の一角を示される。

「こ、ここですか？」

「そうそう、早く書いてね」

「え？で、でもちゃんとなんて書いてあるかみないと…」

「大丈夫大丈夫。ほら…メロのお名前、書いて？」

「っ！」

耳元で低く囁かれてぞわぞわと背中になんか感じたこともない刺激が走る。

「ひっ…」

「…いい子だから。早くお名前、書いて…？」

「んう…やつ、ちよ、耳元で話さないで…ッ♡」

「やめて欲しいなら、な・ま・え。書いて？」

「ううう……！」

頭の上にピーンと立つ猫耳にすりすり顎を摺り寄せられる。初対面の男のこんな行為をいつもなら許すはずもないのに、ルイスの低くて甘やかすような声を聞いていると、だんだん逆らえなくなってくるのだ。

「ふぁ……う……？」

「……かわいい……、ほおら、ここ」

「こ……こ？」

「うん、そう。書いて？」

「ん……」

瞳をトロンと蕩けさせたメロが震える手で羽ペンを持ち、名前を書こうとする。

「…おい、本人の同意なしにパーティーを組ませるのは規約違反じゃねーか？」

「ちっ！」

その手を褐色の手が止める。メロがぼやんとした顔で上を見ると、ピンク色の長い髪が美しいオーガ族の桜羅が苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「お前なあ…いきなりこんなこととして可哀そうだと思わねーのか？」

「桜羅には言われたくないよ。番を見つけてすぐに手を出したくせに。盛り の付いた野生動物と一緒にだね」

「子リスちゃんはもう大きかっただろ。おまえんとこは流石に小さすぎだ」  
「だから待っただろ？もう十分待った。何か文句があるの？」

「…お前とこいつじゃ実力差がありすぎる。まずはF級から始めるのがセ

オリーだろ」

「…僕に命令するな。殺すぞ」

「ああ？やってみるか、この優男」

「その角へし折ってやろうか、筋肉バカ」

二人が至近距離で睨み合う。

「こら、ギルドで騒ぐな」

そんな二人の間に右京が割って入る。

「ルイス。お前がこの子とパーティーを組むのは無理だ。まだ我慢しろ」

「…残念。もう少しだったのにね」

ルイスがにっこりと笑うと、目の前にある書類をビリビリに破いてしま  
う。

「あ…」



「じゃあ今日から君はF級冒険者として頑張ってもらおうよ」

「あ、はい」

はっと我に返ったメロがぺこりと頭を下げる。するとルイスは椅子に座ってテーブルに頬杖をつくニコニコと笑って口を開いた。

「その小さくて可愛い体で魔物を倒せるか見ものだね。獣人族だけど、ほかの種族と比べても小さいから子ども扱いされるだろうし。クエストに足手まといはいらないから、もしかしたら誰もパーティーを組んでくれないかもしれないよ？そしたら僕のところおいで。すぐにパーティーを組んであげるからね、僕の子猫ちゃん」

「…」

「…俺は知らないからな」

ルイスの言葉にメロの頭にカーッと血が上る。桜羅と右京はため息をつ

いて、先に食堂へと向かった。

「っ！わ、分かってます！自分でやりますから、もう関わってこないでください！」

「え？なんで怒ってるの？僕はただ…」

「っ大っ嫌い！！！！！！」

「えっ!？」

それから自分を見かけたらすぐに意地悪なことを言うルイスのことをメロは大嫌いになったのだった。



ギルドの中に入ると、すでに真夜中なこともあって、受付嬢のほか数人し

か人がいなかった。

「あ、メロさん！お疲れさまでした！」

すぐに声をかけてくれたのは、ギルドに併設された食堂で働いているアリスだった。いつもニコニコと笑って仕事をしており、弱くて小さい自分にも優しく声をかけてくれるアリスのことを、メロは前から好ましく思っていた。しかし、最近になって大変貴重な癒しの力の持ち主であり、ルイスとパーティーを組む同じくS級冒険者の桜羅の番であるということが分かり、なんとなく前の様に気軽に話すことができなくなっていた。

「あ、ありがとうございます」

アリスは髪も服も綺麗に整えられていて、桜羅に贈られたピンク色の装飾品を身に着けている。花が綻ぶように笑うその顔は美人ではないけれど、とても可愛らしくて、桜羅に大切にされ、愛されていることが一目見ただけ

で伝わってくる。

「メロさん、大丈夫ですか？すごく疲れてますよね？」

アリスの綺麗な手が自分に触れそうになった時、我に返ったメロが急いで後ろに下がる。ぽかんと口を開けているアリスにメロは下手くそな笑顔を向けて「すみません！クエスト完了申請してきますね！」とバカでかい声を出してカウンターへ急いだ。

（あんなに綺麗なのに、魔獣の皮脂やら体液で汚れた私に触らせる訳にはいかない！）

それにアリスは気付いてなかったが、その背後から椅子に悠々と座り、酒を飲んでいる桜羅がこちらをじっと見ていたのだ。そのオーラと威圧感に気圧されて、メロは顔を真っ青にしながら早足でアリスから離れた。重い革袋を何とかカウンターまで持っていき、美しい受付嬢に声をかける。

「あの、クエスト完了申請お願いします」

「あ！メロさん、お疲れさまでした！今日もだいぶお疲れですね。書類をまとめるので、あちらの席でお待ちいただけますか？」

「はい…」

疲れはピークに達していて、今にも眠りこけそうになってしまふ。またも重い革袋を担ぎ上げ、空いている席に座るとすぐに眠気が襲ってきた。

（ちょっとだけ…、どうせ書類が準備できたら受付嬢さんが声をかけてくるだろうし）

そんなことをうとうとしながら考えていたメロは、いつのまにかテーブルに突っ伏して眠ってしまったのだった。

「んあ!？」

眩しい光を感じてガバツと起き上がると、そこは自宅のベッドの上だった。ふわあと大きなあくびをして自分を見下ろすと、お気に入りのパジャマに着替えているし、魔獣の体液で汚れた体もさっぱり綺麗になっている。

「また寝ぼけてたなあ…」

ふわあと大きなあくびが出る。最近、クエスト完了申請を待つ間に仮眠をとると、気付けば朝になってしまうことがあるのだ。それも必ず自宅のベッドで目が覚める。もしかして誰かが眠っている自分を甲斐甲斐しくお世話してくれているのではないかとも思ったが、自分が帰って来る時間帯にギルドにいるのはほとんど受付嬢だけなので、彼女たちがやっているとは考えにくい。

「…ルイスな訳もないしね」

たまにルイスが桜羅ともう一人の仲間の右京とともに酒盛りをしている

ことがあるが、まさか自分に嫌味を言いまくるルイスがそんなことをするとも思えない。

「まあ、楽だからいいんだけど…」

きつと寝ぼけながらも自分で頑張って布団まで入っているのだろうと判断したメロは、目を擦りながらベッドから出る。そのパジャマの隙間から覗く、腰のあたりに付いた赤い痕にも気付かずに。



「うう…今日もまたこんな時間になっちゃった」

メロは悲鳴を上げる体を何とか動かして街に戻って来た。今日のクエストは街から少し離れた場所にある村からの依頼で、畑に出る下級魔獣を退

治して欲しいというものだった。魔獣自体は人の命を奪う程危険なものではないが、いかんせんその村の特産物である果物を食い荒らしてしまうらしい。甘酸っぱくて美味しいその果物は収穫期を迎えていて、このままでは村人たちが飢えてしまうと、なけなしのお金を村で集めてギルドにクエスト依頼を出したようだった。

しかし、その報酬金はほかのクエストに比べてかなり低かった。加えて果物に付いたワーム型の魔獣は一匹ずつ取り除き、少し特殊な火炎魔法で畑を清めないといけないという面倒くささ。上位冒険者はもちろん、下位の者であっても嫌がるような依頼だった。クエストボードの隅っこに張り付けられたその依頼を見たメロは「冒険者たるものどんなクエストにも対応できるようにならないと!」とそれを引っ掴んで受注してしまった。そして一日中、村人たちとともにワームを駆除し、火炎魔法でファイヤーしてきたの



だ。かなり疲れたが、駆除活動に参加した村人たちと抱き合って喜んだことを思い出し、メロはふふつと笑う。

「たくさんもらったなあ。これで数日は生きられるかも」

手に持った革袋には、村人からもらった今が旬の甘酸っぱい果実がたくさん入っている。すごい魔法でばーんと解決できなくて申し訳ないと謝るメロに、村人たちは笑顔で「あなたで良かった」と言ってくれた。

「…もっと頑張ってたくさんクエストをこなして、強くなろう」

——もっともつと困っている人を助けられるようになりたい。自分をおつて助けてくれた人のように。

メロは戦争孤児だった。この街から離れた国境沿いの小さな村で生まれたメロは、幼い頃、他国との戦乱に巻き込まれ、両親を失った。まだ3歳ぐ

らいの頃だ。村に火の手が上がり、メロは崩れた家の下敷きになった両親を泣いて呼ぶことしかできなかった。そんなメロの泣き声に気付いた他国の兵士が、ニヤニヤと笑いながら自分に刃を向けてくる。助けてと絞り出した声は誰にも届きはしない。逃げ惑う人々が気付かないまま、小さな命が失われようとした時。メロを大きな羽が覆い隠した。涙のせいで視界がかすむメロを優しく抱き上げたその人は、ぐちゃぐちゃの頬に優しくキスをしてくれた。

「間に合ってよかった」

低く優しい声がメロの心を癒す。

「ああ、まだ小さいね。このまま連れて行ったら流石に可哀そうかなあ。仕方ない、僕は優しい番だから少しだけ我慢してあげる」

顔中にキスを落とされ、くすぐったくなったメロが笑うとその人の口角

が上がる。

「やっと笑ってくれた。可愛いね、僕の番。大丈夫、これから僕が君を見守ってるから。すすくと育つんだよ」

クラッと急に眠気が襲ってきたメロはそのまま意識を失う。気付いた時にはギルドのあるこの街の孤児院のベッドで眠っていたのだった。

「ああ……王子様。やっぱり幻だったのかなあ」

記憶も曖昧で、自分を助けてくれた人の顔も思い出せない。しかし、のちにその人物が冒険者であり、とんでもない強さで他国の兵士を圧倒して村を救ってくれたということを風の噂で聞いた。メロは顔も覚えていないその人を「王子様」と呼び強い憧れを抱き続けている。そして、彼のように強い冒険者を目指しているのだ。

「まあ…、だいぶ先は長いけどね」

自嘲気味に呟きながら、真つ暗な道を歩き、やっとギルドの明かりが見えてくる。メロは近づくに連れて、ギルドから大きな笑い声や話し声が聞こえてくることに気付いた。

（ああ、そういえば今日ってなんかギルドの創立記念でパーティーするって言ってたなあ）

ルイスのようにS級の冒険者たちはギルド直々に招待されているらしいが、まだF級の自分はもちろん招待されていない。クエストに出る前にアリスから「美味しいご飯だけでも食べに来て」とは言われていた。

「…人が多いの嫌だなあ」

ギルドに所属する冒険者には色んな人がいて、中には口さがない者もある。メロが初めてギルドに来た時に馬鹿にしてきた男のように。冒険者は実

力主義の考え方が一般的で、メロのように体も小さくて弱い冒険者は馬鹿にされることも多いのだ。

「でも早くクエスト完了申請したいし…」

疲れ切った体を引きずりながらギルドの扉を開けようとした時。

「あのメロってF級の冒険者、ほんっといらねえよなあ」

「…」

自分の名前が不穏な会話の中に出てきて、メロはピタリと立ち止まる。どうやら酒に酔った男が話しているようで、メロはギルドの中に入ることができなくなった。

「あいつさあ、ほんとうちのギルドの面汚しだよ。あんなガキみたいな見た目でさあ、冒険者はおままごとじゃないんだってえの。誰でもできるような依頼ばかりチマチマこなしやがって、恥ずかしくねえのかね、あいつ！」

ゲラゲラと汚い笑い声上がる。その声は一人でなく、少なくとも数人がその意見に同意していることが分かった。自分の体が震えそうになるのが唇を強く噛みしめて耐える。

（大丈夫。いつものこと。こんなことはずっと言われ続けてきたんだから今更傷つくようなことじゃない）

——素知らぬ顔をして中に入ってカウンターに行けばいい。いつものように完了依頼を出して、それで。

「っうう…」

メロの瞳からボロツと涙が零れ落ちる。

「うう… うあ…!」

立ち尽くして俯いたままのメロの瞳からボロボロと涙が零れ落ちて地面に染みを作る。

役立たずなのは誰よりも自分が分かっている。3年たってもパーティーメンバーも作れず、一人でチマチマした依頼をこなすだけ。そんな簡単な依頼でも毎回ボロボロになって戻って来る。S級冒険者が3人も所属し、王家や他国から重要な依頼がくることがあるこのギルドに所属することを誇りに思っている冒険者もあり、そんな人たちにとってメロの存在は目障りなのだろう。

「泣くな…泣くな」

弱いのが悪い。強くなれないのが悪いのだ。

――動け。批判を受け止めろ。

それでも前に進むしかないのだから。自分には寄り添ってくれる家族も恋人もいないのだから。

「…ああ、メロのこと？」

「っ！」

聞こえてきた艶のある声に、メロはびくりと体を震わせる。いつも自分に意地悪を言って揶揄ってくる美しくて強い男。そんな男がメロについて言及しようとしている。ぐうつと胃から何かがせり出してきそうで、メロは口元を抑えて後退る。

（嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。ルイスからだけ私への批判を聞きたくない！）

メロはくるとギルドに背を向けるが、覚束ない足元のせいで、その場にべしゃつと倒れ込んでしまう。

「そうそう！あのガキみたいな女ですよ！ルイスさんも目障りでしょ、あんな弱い奴！」

ぐうつと目頭が熱くなり涙がこぼれる。

「やだ：聞きたくない：やだあ」



もう一度立ち上がり、汚れた顔を涙でさらにぐちゃぐちゃにしながらヨタヨタと歩いてメロはその場を後にしたのだった。

「お、いらっしやい。って、あんたかなり疲れてないか……？」

「汚れててごめんなさい。迷惑だったら帰りますから……」

「ああ、いい、いい！こんな下町の店なんてもとから汚れてるようなもんだ。ほら座とけ！なんか出してやるから」

「でも……お金もあんまりなくて」

「金が入ったらちゃんと払えばいい！ほら！」

メロが入ったのは、冒険者になった時から通っている下町の飲み屋だった。あまり金がない人々たちが多く住む下町にある有名な店だ。素行の悪い者たちも出入りしているが、かなり体のデカイゴブリン族の店主が目や光

らせていることと、飯が上手いことを理由に、店内での争い事は禁止となっている。メロは定位置となつてゐるカウンターの一番奥に座ると、店主が出てくれた味の濃い煮込みをちよびちよびと食べ始めた。

「ほら、これはサービスだから。また痩せたんじゃねーか？」

「うう…すみません」

「なんだ、顔がべしやべしやじゃねーか。おーい、誰か拭くもの持つてきてやれ」

店主の声に客の誰かがポンと布を投げしてくれる。それでメロの顔をゴシゴシと拭き、店主はにっこりと笑つた。

「腹減つてると元氣も出ないぞ。ほら、食え」

「いつもすみません」

「いいんだよ。俺は店で忙しいからなんかあつたら声掛けろよ」

店主はメロにとっても優しくしてくれるが、それは何も自分に限ったことではないと分かっている。店主は困った人を放っておけないのだ。店主が自分のように冒険者になっても上手く稼げない人々をお世話している場面を何度も見てきた。

「…美味しい」

店主の料理は絶品だ。一口食べると、体が空腹を思い出したようで、お腹からきゅるっと音が鳴る。

「…今日もクエスト頑張ったんだから、良しとしよう」

深夜になってギルドに誰もいなくなったら申請に行こう。そうすればお金が入ってくる。

「ふふ。ならある分のお金、全部使っちゃおうかな！」  
嫌な気分を吹き飛ばすには酒が一番だ。

「店主！お酒ください！」

「おお！元気出てきたじゃねーか！」

店主が振り返ってニカッと笑ってくれた。

「だれがあ、負けるかあ！」

「おうおう、その意気だ。ってお前、ちゃんとギルドまで行けるのか？」

「行ける！歩ける！」

「…ふらふらしてるけどなあ。うーん」

「大丈夫ですって！」

メロはにこにここと笑って荷物を担ぎ上げる。お酒をかなり飲んでいい気分になっているメロは店主にブンブンと大きく手を振って歩き出そうとした。

「こおら、そんなに酔っぱらって……。そんなフラフラなのに一人で夜中に出歩いたらダメだって僕、何度も言ってると思うけど？」

「んあ？」

ばふっと誰かに当たってしまい、メロはトロロンとした瞳でその人物を見上げた。

「ああ、もう。こんなにお顔がトロトロになる程飲んで。どうしてギルドに来なかったの？」

「ルイス……？」

呆れ顔で自分を抱きとめているのはルイスだった。首元まで覆われたインナーに、細めのパンツと編み上げのブーツ、体を覆う外套も両手に付けた手袋も全て真っ白なルイスは、暗闇の中でまるで光っているように見えた。

「頬もこんなに赤くして。ほら、おいで」

「あっ……！」

ルイスは片腕だけで易々とメロの体を抱き上げ、もう片方の手で荷物を持ってくれた。

「ほら、今からギルドに申請に行くんでしょ？」

「う、うん……」

ルイスのとんでもなく整った顔が目の前にあり、メロは顔が赤くなっていくを感じる。ルイスはそんなメロに視線を向け、クスッと笑いながらゆつくりと歩き出した。

「今日もクエストに行ってたんだね。全然帰ってこないからそこら辺の奴らに聞いたたら、下町で見かけたって言うからここだと思って迎えに来たんだよ」

「っひゃあ！ちよ、な！」

ルイスが突然メロの頬に優しくキスをした。メロは目を見開いたまま、ガチンと固まってしまった。

「ん？何を慌ててるの？」

ルイスがきよとした顔で首を傾げる。

「な、何をつて！い、今キスした！」

「キス？こんなのキスになんて入らないよ。挨拶みたいなものでしょ？ほら……」

「ひゃあ！ちょ、や、やめてつてば！」

またルイスが頬に口付けてきたかと思うと、そこを大きく分厚い舌でレロオ♡と舐め上げてきた。ひくん♡と身体が震え、メロは思わずルイスの体に縋ってしまう。

「どうしたの？びっくりしちゃった？」

「んう♡」

クスクスと低い声で笑いながら、ルイスがメロの耳朵を甘噛みしつつ囁いてくる。

「っう…う…あう♡」

自分の情けない声を聞かれたくなくて、メロは両手で自分の口を塞ぐ。それを楽しそうに眺めているルイスは少し強めにメロのふさふさの耳に歯を立てた。

「ひいん！」

「なんだ、可愛い声出るじゃないか」

「やつ…ルイス…なんでっ！」

「ギルドに帰ってこないであんなところで一人で飲んでたからお仕置きだよ。メロは小さくて弱いんだから、あんなところに一人で行ったらダメ」



「っ…お仕置きなんてされる筋合いっ…ひいいんッ♡」

「口答えは許さない」

ルイスが大きく口を開けてメロの華奢な首筋に噛みついた。そのままレロレロ♡と舌を動かして喉全体を涎でいっぱい、舌で舐め続ける。

「ふう…んん♡…やう…離して…やだあ…ッ♡♡」

メロがルイスの髪を引っ張って抵抗するものの、大きな体はびくともしない。ルイスの舌使いに体がぼーっとしてきて、メロの動きが鈍くなってくる。それをいいことに、ルイスの手がメロのお尻に伸びてきて、ズボンから出ている尻尾の根本をきゅ♡と握り込んだ。

「きやうう♡♡」

目を見開いて天を仰いだメロはワナワナと体を震わせて、ルイスを見た。

「な、嘘！やだやだやだ！こんなところで触っちゃやだあ！」

尻尾は非常に近い人、例えば恋人や家族にしか触らせないものだ。特に根本は非常に敏感で、性行為中に触り合って楽しむものもある。そんな大事な部分をルイスにコスコス♡と触られて、メロは涙目になりながら首を横に振った。

「やだぁ…おね、お願いッ♡やめてえ…ッ♡」

「…気持ちいの？顔、真っ赤だよ？」

「ルイスう…おね、お願いい…！外でこんなのやだぁ！」

もう時間は真夜中で、街を歩く人もほとんどいない。しかし、歩きながら甘い声を出す自分にいつか気付かれるかもしれないとメロは気が気でなかった。

「おねがい…ルイス…なんでもっ…ひう♡…いうこと聞くから…ッやだぁあ♡」

「…何でも？」

「んう♡うん、聞くからあ♡」

やっとメロの首元から顔を離れたルイスが涙目で顔を真っ赤にしたメロを覗き込んでくる。口元から溢れた涎を舌で舐めとりながら、ルイスがいやらしく笑う。

「分かった、ならお仕置きはこのぐらいにしといてあげる」

「っふ…」

ルイスが爽やかに笑い、再びテクテクと歩き出す。その一定のリズムと酒を飲んだことも相まって、メロはだんだんと眠くなってきた。うとうとして舟を漕いでいるメロに気付いたルイスは、今まで見せたこともないような優しく蕩けた表情でメロの頬を優しく撫でる。

「疲れたんだね、僕のメロ。ほら、あとは僕がやっておくからゆっくり寝る

んだ」

（なんだか…聞いたことがある声…）

いつも自分の頭を優しく撫でながら囁かれているような気がする。けれどいつそんなことをされたのか、メロには全く記憶がない。この遅しくて厚い胸板と、心地よい体温、そして体からふにやりと力が抜けてしまうような甘くて少しだけスパイシーないい香り。

「お休み、僕の…」

最後の言葉を聞き取れないまま、メロは意識を手放したのだった。



「ん…」

ゆっくりと意識が覚醒してきたメロが目を開ける。

「っひい！」

するとまるで神が作った芸術品のような綺麗な顔立ちが目飛び込んできて、悲鳴を上げそうになった。

（っあゝル、ルイスだ！な、なんで私ルイスと一緒に寝てるの!？）

頭を動かして周囲を見渡すと、そこは見たこともない程に豪華な部屋だった。ベッドのマットもシーツもふかふかで優しく体を包み込んでくれる。天井からは真っ白な天蓋が降りてきて、太陽の光を和らげてくれていた。そこはメロの部屋より何倍も広くて、高そうなソファや机、テーブルのほか、古そうな書物がびっしりと並んだ本棚もあった。

（もしかしてここ…、ルイスの部屋？）

メロが自分の体に絡みつくルイスの腕を何とか外してベッドから脱出す

る。音を立てないようにゆっくりと歩き、部屋の中を見回したメロは自分が見たこともないパジャマを着ていることに気付いた。

（ルイスが着替えさせたの？）

自分の裸を見られてしまった可能性を思い、メロは顔を真っ赤にする。早くこの部屋から出て行こうと、自分の服を探すものの、一向に見つからない。

「うう：一体どこにあるのお」

四つん這いになりソファの下まで確認していると、クスクスと楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

「そんな格好で何してるの？まるで本物の猫みたいだなあ」

「なあっ！」

馬鹿にされたと感じたメロは尻尾をポツと膨らませて立ち上がり、ベッドにいてであろうルイスに鋭い視線を向けた。そして固まった。

「おはよう、メロ。良く眠れた？」

「っあう」

とんでもなく綺麗で色っぽい天使が微笑んでいる。上半身が裸なせいで、ルイスの真っ白だが、バキバキに割れた腹筋が惜しげもなく晒されている。顔を真っ赤にして口をパクパクと開け閉めすることしかできないメロを見て、楽しそうに笑ったルイスは、立てた膝に頭を乗せて、目を細めてメロのことを眺めている。

「な、なんでルイスがここにいるのよ！」

顔が赤くなってしまったのを誤魔化すようにメロが大きな声で喚く。しかしルイスはあまり気にならないようで、気だるげに笑いながら「だってここが僕の部屋だから」と教えてくれた。

「ルイスの部屋？」

「うん」

「な、なんで私がルイスの部屋にいるの!？」

「それはメロが昨日、ギルドに着く前に寝ちゃったからだよ。お家の場所も知らないし、女の子を真夜中に一人置いてく訳にもいかないから、僕の家に関連してきたんだ。メロの体は魔獣の体液で汚れてたからお風呂で洗わせてもらったよ。一人で寝るように言っただけど、メロがくっついて離れないからしょうがなく一緒にベッドに寝たんだ」

「そ、そんな…!」

「嘘だと思う？」

じっと見つめてくるルイスに、メロは強く否定できなかった。最近、クエストで疲れてきつてしまい、ギルドで寝てしまうことも多い。ルイスが言っていることは恐らく真実なのだろう。



（わ、私、なんて恥ずかしいことを…っ！）

普段はあんなに目の敵にしている男にお世話をしてもらうなんて。

「め、迷惑かけてごめんなさい…」

それでもお世話をしてもらったのは確かだ。メロはその場でペコリと頭を下げた。

「うん？謝る必要なんかないよ。僕にとってはなんてことないんだから」

「なんてことない…？」

「うん」

ルイスの言葉に心がズキッと痛む。

（…それってほかの女の子にも同じようなことをしてるってこと…？）

そこまで考えた後に我に返ったメロはぶんぶんと首を振って女々しい考えを打ち消した。

（な、なんで私、こんなことを考えてるの!? ルイスは私に意地悪ばかりする奴なんだから!）

「と、とにかくありがとう! 私帰るから! あ、あのそれで私の服を……!」

「ああ、メロの服なら今洗濯してるよ。すごく汚れてたからね」

「そ……そうだよね」

確かにあの服は一度綺麗にしないと着られないだろう。

「あ、あの……何か私でも着られそうなお洋服って……」

ある訳がないと思いつながら恐る恐る尋ねると、ルイスは「ああ、待って」と言つてあくびをしながら立ち上がる。そのままクローゼットに向かって扉を開いた。

「今日は少し冷えるからこれとこれかな。今日もクエストに出るんですよ? ならこの靴だね。守りの呪いがかけてあるやつだから、結構役立つよ」

「ひっ！こ、これは！」

ルイスが持ってきた服や靴、下着を見てメロはざっと顔を青くする。それはあまりにも高くてメロが買えないようなものばかりだった。守りの呪いがついた靴なんて、メロがずっとずっと欲しくて、けれどあまりの値段に毎回見るだけで終わっている代物だ。

「な…なんで、これ」

「…さあ、なんででしょう？」

ルイスが意地悪そうな笑みを浮かべてメロの前に跪く。

「座って。履かせてあげる」

「あ…」

トンと頭を押され、後ろにあったソファにドスンと座り込んでしまう。ルイスはメロの足首を優しく掴むと、クイッとそれを持ち上げ、親指にキスを

落とした。

「ひゃあッ！ちよっ！」

「黙って」

「っうう」

かじッ♡と親指に歯を立てられ、メロはぐっと押し黙る。それを見て「いい子」と低く呟いたルイスは舌で親指を遠慮なく舐め回し始めた。

「あう…やっ…ルイ…ルイス…やめっ」

「ふ…小さくて…可愛い…。柔らかくて…食べなくなるね」

ぷちゅぷちゅ♡と指を口から出し入れされたかと思えば、ぢゅうう♡と強く吸い上げられる。されていることが理解できなくて、メロは目を見開きながら身を振ろうとする。

「…逃げるつもり？」

「きゃあ！」

目を細めてこちらを見たルイスがいきなりメロを抱き上げてソファからベッドに押し倒してくる。

「やあ！」

「ふふ、メロは猫獣人だから体が柔らかいね」

「やだ！こんな体勢やだあっ♡」

ルイスはメロの内ももを掴んでグイっと上に押し上げる。まんこを天井に向ける恥ずかしい格好になったメロは顔を真っ赤に染めた。

「いやじゃないの。：僕にも忍耐の限界ってものがあるんだよ、メロ」

「ひうう！！???♡」

ルイスが逞しい腰をメロの足の間に入れてきて、まんこに服越しでも硬くなっていることが分かるちんぽをズリズリ♡と擦り付けてきた。

「やあああッ♡」

「ふッ♡…はっ♡…ん♡」

「ひいいッ♡」

腰をカクカク♡と振られながら、また足の指を咥えられ、ぢゅぷぢゅぷ♡と音を立てて舐めしゃぶられる。

「きやあんッ♡あゝッ♡」

「…可愛いねメロ。僕のおちんちん、おまんこにへコへコ♡ってされるの気持ちいいの…?」

「やだあ…ルイスのばかあ…んゝッ♡へん…たいいい♡」

「はは?僕が変態…?バカ言わないでよッ!」

「っゝうううッ♡」

硬くなったちんぽがぐりい♡と強くまんこに押し付けられ、くんッ♡と

メロの体がのけ反る。

「寧ろ逆だよ。…メロは僕が大人だったことに感謝しないと」

ちゅぽッ♡と足を口から引き抜いたルイスがメロの顔の両脇に手を付いて、至近距離で見つめてくる。

「こおんなに…可愛くて…エッチで…食べちゃいたくて堪らないのに…ずうっと我慢してあげてたんだ」

ルイスがぐう♡と腰を押し付けたまま振るせいで、密着した場所からぬちゃぬちゃ♡といやらしい水音が響き始める。

「んゝ？変な音がするね。もしかしてメロ、お漏らししちゃったの？」

「っなッ！ちがっ！」

「ほんとかなあ？ちよっと確認するね？僕のベッド、汚れちゃうかもしれないから」

「ちょ、やだああ！」

ルイスの右手がつーっとメロの腹を辿ってズボンの中に入っていく。

「…湿ってるよ？やっぱりお漏らしじゃないの？」

「くうんッ♡」

ルイスの指が下着越しにカリカリ♡とメロのまんこを引っ掻く。それがピヨコン♡と立ち上がったクリトリスをかすめて、メロはぎゅうつと目をつぶってその刺激に耐えた。

「ちが、お漏らしじゃな…ッひい♡」

「直接触ってみたいと分らないね♡」

今度はルイスの手が下着の中にまで侵入してきて、直接まんこをくちゅくちゅ♡と弄り始めた。

「やだやだ、うそっ♡やめでえッ♡」



メロは自分のズボンの中突っ込まれたルイスの手を掴んで、必死に引きはがそうとする。しかし、血管が浮いた自分の二倍程はあろうかという手を引き抜くことなどできるはずもない。

「メロ…、ここ…、なんでこんなに濡れてるの？」

「あううう~~~~~ッ♡♡♡」

ちゅぷう♡という音とともに、ルイスの太い指が一本メロの中にゆつくりと差し込まれた。

くちくちくちくちくちくちくちくちくちく♡♡♡

「はうッ♡~~~~っうんッ♡んッ♡んッ♡んッ♡」

まんこの浅くてザラザラしたところを指の腹で何度も押し込まれて、メロの視界にバチバチ♡と火花が散る。

「いいううう~~~~♡やだやだあ、しょこ、やだあッ♡るいすう、やだ

つてえ♡」

「嫌じゃないでしょ？これが気持ちいいだよ。…ああ、我慢した甲斐があったなあ」

「ひぐううう~~~~♡♡♡」

ルイスが指を動かしながらメロに覆いかぶさってきて、耳元で卑猥な言葉を囁き続ける。

「メロのトロトロおまんこ、僕の指ちゃんぽおいしいってもぐもぐしてるよ？ほんとに嫌なの？こんなにいっぱい涎垂らしてるの？ほんとに僕におまんこいっぱいほじほじ♡ってされて感じまくってるんじゃないの？」

「ひっ… あ~~~~♡ちが、ツ치가うもん…ちがうう♡」

「違わないだろ。さっきから違う違うって。…お仕置きしないと分かんないか」

「ひいッ♡」

ずりりと下着ごとメロのズボンを脱がしたルイスがまたまんこを天井に向けさせ、舌なめずりをしながら笑う。

「うわぁ、まんこっころっころ…♡」

「触っちゃだやだぁ♡」

ぴっちりと閉まったまん筋をルイスの指が優しく撫でる。それだけでひくひく♡と痙攣しながら、こぷう♡と透明な愛液を漏らすメロのまんこを見て、ルイスが喉を鳴らしながら涎塗れの舌を出してそれをメロに見せつける。

「僕のおっきい舌で、メロがグズグズに溶けちゃうまでおまんこ舐め舐めしてあげる。今日はおちんちんは我慢してあげるから、僕が満足するまでおまんこくちゅくちゅさせてね？」

「やあ…やだ…やだあ…♡」

「顔、隠すな」

「ひい」

「自分で手を外して。エッチで可愛い顔、僕に見せて。舐めてる間もずっと僕の顔見てて。誰がメロのこと気持ちよくしてるか、そのグズグズな頭に叩き込んで」

「はう… うう…んう…♡」

メロの息が上がってきて、生理的な涙がボロボロと零れ落ちる。

「足開いて。自分で持つて。僕が舐めるのに集中できるようにずっと持つとくんだよ」

「あ…う…」

（嫌なのに…嫌なはずなのに…♡）

ルイスの透き通って見える美しい瞳に見つめられると、何でも言うことを聞きたくなってしまふ。いつもは胡散臭い笑みを浮かべるその顔が、自分の前で蕩けているのを見ると、きゅうん♡と胸が甘く痛む。甘やかすようないつもよりゆっくりとした、そして意地悪な声を聞くと、それだけでまんこがひくついてしまうのだ。

「メロ。僕の言うこと…大事な大事な番の言うことが聞けるよね？」

「つがい…？」

「そうだよ。番。僕の大事な番だ」

「っあ…」

フラッシュバックしたのは幼い頃の記憶。兵士に殺されそうになった自分を包み込んでくれた大きな体と優しい声。

そして今、目の前にある美しく整った顔とあの時と同じくらい優しい声。

「ルイスが…王子様…?」

「ふふ、僕のこと王子様って呼んでくれたの? 嬉しいなあ。ならメロはお姫様かな?」

上機嫌に笑うルイスがメロの頬を優しく撫でてキスをする。

「ちゃんとして僕のことを覚えていたんだね。とってもいい子だ。…まあ忘れてたら思い出させる予定だったんだけど」

「え…あ、ルイスが…私を…?」

「そうだよ、僕の愛しい番。君の可愛さは小さい時からずっと変わらないね…」

ぢゅううううううう~~~~~~~~ツ♡♡♡♡♡

「おツツツ!!!????♡♡♡♡♡」

ルイスの顔がメロの股間に埋まったかと思うと、立ち上がったクリトリ

スを激しく吸い上げられる。ぴんツ♡と足を伸ばしたメロは何も分からないままに絶頂を迎えた。

「  
づ  
お……？  
ん  
おツ……？ん  
い  
い……ツ  
♡  
♡  
♡  
」

「はは…♡初めてのアクメ、きもちいい？」

「やあ：しよこ、で喋ったらやだああ♡」

ルイスがレロレロ♡とクリトリスに舌を這わせながら笑う。声の振動がまんこに伝わってきて、メロの体にビリビリと快感が走った。

「こんなことでイってたら今後大変だなあ。僕がおちんちんねじ込んでちゅこちゅ♡って可愛がったらそれだけでにゃんにゃん♡って可愛く啼いちゃいそうだね。：堪えないなあ」

ぢゅうううう♡ちゅぷちゅぷちゅぷちゅぷちゅぷ♡

「は  
う  
う  
う  
う  
う  
う  
う  
ツ♡  
り♡  
ゆいすう…きやあああん♡」

もう一度クリトリスを吸い上げた後、ルイスが太く熱い舌をメロのまんこにねじ込む。ぬめぬめ♡と動きながら奥に進んでいく柔らかいそれに、メロは腰をくん♡と上げようするが、大きな手でシーツに抑えつけられてしまう。

「気持ちいいの逃がしたらダメ。ちゃんと全身で感じて。気持ちよかったイク♡って可愛く僕に教えて」

「あゝゝゝ♡♡ん、おッ♡この声、やだああ♡」

「なんで？すっごく可愛いよ？いつも可愛い声なのに、エッチな時にはそんなにひっくり声で喘ぎまくるの」

「っゝううう、意地悪ッ♡いじわるうゝゝ♡♡♡」

「ほんとのことなのに…」

ひんひんと泣くメロの内ももに宥めるように優しくキスをして吸い上げ



ると、ルイスが二本の指をまんこに入れて、くちよくちよ♡と音を立てて愛撫する。

「う~~~~ッ♡ う~~~~♡」

ぐう♡と歯を食いしばって頭が焼き切れそうな快感に耐えるメロの蕩けた顔を、ルイスはずっと見つめ続ける。

「み、見ないでえ… おおお♡」

「メロは体が小さいから、僕の指、子宮の入り口に届いちゃうね。ほら、ここ。分かる？ コリコリってしてるでしょ？」

「んぎいいい~~~~♡♡♡」

二本の太い指がこりッ♡と子宮孔を引っ搔き、目を見開いたメロのまんこからぶしゃああ♡と潮が噴き出す。それが惜しげもなく晒されたルイスの割れた腹筋をしとどに濡らし、ルイスのズボンまで滴っていく。

「あう…ひあ…ごめ…お漏らし…しちゃったあ…うえ…ふええん♡」

目を見開いた後、顔をぐしゃぐしゃにしたメロが震えながら体を起こし、自分が着ている服で、ルイスにかかった自分の体液を拭き始める。

「ごめ…ごめんなひゃい…ゆるしで…汚しちゃったあ…」

「ぐう…っ！」

幼子のように泣きながら、必死に自分の腹筋や股間のきわどいところを拭くメロを見て、ルイスの喉から低い声が漏れる。そのままルイスはぎゅううっとメロの体を抱きしめ、その顔面に何度もキスを落とす。

「可愛い可愛い可愛い可愛い…っ♡くそ…」

「ふう…うああん」

「ああもう！泣かないで、おっしこじゃないから。これは気持ちがいイ時に  
出るものだよ」

「気持ちいい…時？」

「うんそうだよ」

「お漏らし…してない…？」

「…いずれは見せてもらうけどね。…そんなことより、体は大丈夫？」

「から…だ…？なんでえ…？」

「うゝん、そろそろだと思うんだけど」

ルイスが蕩けた表情のメロの鼻をかぷかぷ♡と甘噛みしていた時。

ドクンツツツ♡♡

「あ…え？ゝゝゝゝツ！！…？…？…♡♡♡♡」

メロの体にばちばち♡と体を震わせる程の快感が走って、ぷしゃあ♡と

まんこから再び潮が噴き出した。

「あっ…うんい…っ おッ… おお〜〜〜〜ツ!!???.?♡♡♡」

のけ反って激しい連続アクメをキめるメロの体をルイスがぎゅううつと強く抱きしめる。

「気持ちいいねえ♡大丈夫大丈夫」

「うゝゝゝゝツ♡♡  
うゝゝゝゝツ♡  
うゝゝゝゝツ♡」

次から次に快感がせり上がってきて、メロは訳も分からずルイスにしがみつくことしできない。

「ふふ、天使族の唾液は高い治癒効果があるととても貴重な物なんだ。天使族だけの秘密だからほかの人に言っちゃだめだよ？」

「なんかぐるううう♡ルイスう、ごわ、ごわいい♡」

「あ、あとね、強い催淫効果もあるんだ。子供がでにくいから、番を見つ

けたらすぐに発情状態にできるようにって理由らしいけどね。ああ、大丈夫。気持ちいいのが続くだけだよ。：おちんちん挿れたらこんなものじゃないから、覚悟しておいて。ほら、イクイクするとこを僕に見せて？」

「あああ~~~~ツ♡イグイグイグウ~~~~♡」

齒を食いしばって絶頂を繰り返すメロの顔にルイスが何度も優しいキスを落とす。

「可愛い可愛い僕の番：♡何回かイッたら落ち着くから頑張ろうね♡」

「ん~~~~~~~~ツ♡♡♡」

心底嬉しそうに自分を見つめるルイスに必死にしがみつきながら、メロは何度目か分からない絶頂を迎えたのだった。